キルギスにおける国際協力

奈良文化財研究所は、文化庁の文化遺産国際協力拠点交流事業の一環として、中央アジアのキルギス共和国で文化遺産調査に関する人材育成を、東京文化財研究所に協力しておこなっています。この事業は今年度から始まるもので、遺跡測量に関するワークショップを2011年10月6日から17日まで、キルギス共和国の首都ビシュケクのキルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所およびビシュケクから東方へ車で1時間半ほどのところにあるアク・ベシム遺跡でおこないました。奈文研からは一部期間の参加者も含めると5名が参加し、中央アジア各国（カザフスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、トルクメニスタン、キルギス）の12名（内キルギスが8名）の研修生に対して、講義と実際の測量実習とをおこないました。

アク･ベシム遺跡は、7世紀に玄奘三蔵が立ち寄ったスイヤーブに比定されている都市遺跡で、今までに仏教寺院やネストリウス派キリスト教寺院も発見されています。このように著名で東西交流の舞台となった興味深い地で人材育成事業を進めることができることは、私たちにとっても学ぶことが多く、大変有意義と考えます。遺跡調査の最初に遺跡や周辺の詳細な地形測量が必要であるという、測量の意義が、測量機器の操作方法だけではなくて研修生に伝わったものと思っています。

本事業は、3年ないし4年間をかけて、測量、発掘調査、遺構保全、遺物整理、遺跡整備、報告書の作成といった諸点についての研修を1年に1回ないし2回のペースでおこなっていく予定となっており、奈文研は今後とも多くの部分にかかわって国際貢献に努める予定です。　（企画調整部　森本 晋）

アク・ベシム遺跡における測量研修

コロンビア大学との研究交流始まる

「奈文研ニュース」No.41（2011年6月発行）でもお伝えしましたが、奈良文化財研究所は本年3月に米国ニューヨーク市所在のコロンビア大学中世日本研究所並びに建築・計画・保存大学院と研究協力および交流に関する覚書を交わしました。この研究協力と交流は2011年度から2015年度までの5年間にわたりおこなわれる予定ですが、初年度にあたる今年度は、奈文研から2名の研究者が、コロンビア大学で研究成果の口頭発表をおこない、先方の研究者と議論を交わしました。

研究発表は、9月27日の夕方からコロンビア大学ケントホールの一室でおこなわれました。まず、清水重敦景観研究室長が「Authenticity and Dismantling Repair System in Architectural Restoration in Japan（日本の建築修復における解体修理とオーセンティシティ）」という演題で、続いて石村智国際遺跡研究室研究員が「Memories of Sacred Landscape: Lost Female Rituals and Remaining Cultural Landscape in the Amami Islands, Southern Japan（聖なる景観の記憶：奄美の消えゆく女性祭祀と生き続ける文化的景観）」という演題で発表しました。会場には、建築学・日本文学・美術史学・宗教学などを専門とする先生方と学生の皆さんが、あわせて40人ほど集まりました。

会場の皆さんは、真剣な面持ちで熱心に発表に聞き入っていました。それぞれの発表後の質疑応答では、鋭い質問も出て、活発な議論が交わされました。

コロンビア大学との研究交流では、今後も日本の文化財研究の成果を発信していく予定です。

（文化遺産部　青木 達司）

研究発表の様子